

「英雄教室」

原作小説：新木伸（GJ部ほか）

イラスト：森沢晴行

アニメ「輪廻のラグランジェ」キャラデザイン

ライトノベル「とある飛空士シリーズ」イラスト

「蒼穹のカルマシリーズ」イラスト

英雄教室



引退した「元勇者」が、
勇者を育成する学校に「生徒」として通うハメに!?

勇者を目指す学校で学ぶ生徒たちは、
それぞれ優秀で有能ではあるものの、
それはあくまでもティーンエイジャーのレベル、
生徒レベルでのお話。

主人公は「勇者の力」を失ってしまったとはいえ、
一線級の英雄のなかで17年の人生を過ごし、
現実に魔王さえ倒してきた、規格外のティーンエイジャーなのだった！

その剣技から体術から魔法から、
サバイバルスキルから、
なにからなにまでが「規格外れ」なのだった！

やることなすこと「超生物」扱いされてしまう主人公の、
無理・無茶・無謀・不自然きわまりない！
「平静学園俺ライフ」！
いまここに開幕！

おっす。俺。勇者。俺はいま「楽園」にいる。

魔王を倒して平和をもたらした俺は、同時に勇者の力もすべて失ってしまった。

念願かなって「平民」となれた俺は、生まれてからずっと欲しかった「戦いとも冒険とも無縁な安息の日々」を得られたはずだった。

だが俺にカムバックしてほしい国王のやつが、なんと「勇者学校」なんてものを作っちまいやがった。そして俺をそこに放りこみやがった。

学園の趣旨は、国を越え大陸をこえ、なんと魔界と人間界の垣根さえも越えて、広く素質のある若人たちを集め、次世代の「勇者」を育成するというもの。

魔王もいないっつーのに、勇者作ってどーすんだよ。

学園に集められた俺と同年代の少年少女たちは、たしかに素質があって優秀ではあるものの、なんだかんだいっても、先の大戦では前線に出なかった「大戦を知らない子供たち」だった。実戦にでたこともないくせに、なんであんな鼻高々なのだろう。俺にはそれが不思議でならない。おまえらが倒してドヤ顔しているそれは、魔王軍だとせいぜい尖兵ってところだぞ？

俺はそんな学校で、そんな連中の鼻っ柱をナチュラルにへし折ってまわる日々。

しょうがねーんだよ！俺だって目立ちたかねーんだよ！パン買いに行かされる下級生徒を演じるつもりなんだよ！だけど「加減」ができねーんだよ！「普通」がわかんねーんだよ！

勇者の力を失ったとはいえ、物心ついたときから英雄連中に揉まれまくっていた俺は、剣技や魔法といった一般スキルでも、どうやら一般レベルから大きくかけ離れているようなのだ。

知らなかった。木の棒で神鉄切っちゃ、あかんかったのね。

知らなかった。素手でベビードラゴンをボコることが、そんなエライことだったとは。だってあれ赤ん坊だよ？成体でも古種でもないんだぜ？

知らなかった。魔法結界って破っちゃいかんかったのね。てゆうか。あれ魔法結界だったのね。張ってあったことさえ気づいてなかった。次からはせめてもっと「普通」に張っておいてくれ。

堪忍してくれ。堪忍してくれ。堪忍してくれ。俺は「普通」を知らなかっただけなんだ。

俺は普通に生きたいんだ。だから俺をそんな「超生物」を見るような目で見ろな！

俺は普通だ。ごく普通のなんの変哲もない、どこにでもいるような「平凡」な男なんだ！

「普通」を求める元勇者、現在「一般人」の平静学園俺ライフ。

●主人公



元勇者。
別名「超生物」。

生まれてからずっと「超一流」
の中で揉まれてきたせいで、
ずれた常識を持っている男の
子。

名前:ブレイド。

年齢:17歳。(勇者歴=14年)

身長:170センチ。

体型:
中肉中背。服を脱ぐと体中が
古傷だらけ。最高位の治療魔
法でも治りきらない傷痕があち
こちにある。

髪型:
「勇者の力」を失った反動で、
白髪メッシュになってしまっ
ていて、本人はたいそう気にし
ている。

「俺は勇者なんかじゃないって！ ぜんぜんそんなんじゃないから！ ほら！ ふつーだよ？ ふつー！」

「いやー……。いいよなー……。なごむよなー……。だって訓練してるだけでいいんだろ？ 実戦しなくていいんだろ。最前線に送られて、折れて半分になった剣だけ渡されて、魔王軍の第七軍を壊滅させてこいとか言われなんだろ。メンだってうまいし。風呂だって毎日入れるし」



魔王と相打ちになってようやく勇者を辞められた「元勇者」。

ちなみに相打ちになったのは勇者としての力＝「勇者力」のみ。「勇者力」とは不可能を可能にし、事象を歪ませ、起こりえないはずの「運命」を引き寄せる力。成功確率0%の事象を気合いで成功させる力。

ただ強いだけの人間であれば「英雄」と呼ばれる。勇者力を持つ者だけが「勇者」と呼ばれている。彼はこの時代において確認された、唯一人の「勇者力」の発現者だった。

本人も死にかける大怪我をして、1年近く寝込んでいた。病み上がりで、ぜんぜん本調子ではない。

国王は主人公の大ファン。

「なぜなら彼は勇者だからだ！」とか、こんな感じで猛烈プッシュ。

魔王を倒し、大戦を終わらせた主人公は、人生の夢であり目標でもあった「普通の学生」となるために学校に入ることにしたが、彼の大ファンで、復帰を願う国王の策略で、その学校は「勇者学校」となってしまった。

3歳の頃から大戦のなかで過ごした。彼のもっとも古い記憶は戦闘の記憶。

親もなく同年代の友達もなく、傭兵団のなかで大人たちに囲まれて戦士として育つ。十歳ぐらいの頃には、勇者として頭角を表しはじめる。またその頃、世界のトップレベルの超一流の人間たちと出会い、はじめて「仲間」というものを得る。(正確には自分を残して死んでいかない英雄レベルの仲間たち)

はじめて「日常」を送り、同年代の少年少女にはじめて囲まれて、浮かれてハイになっている。同時に「友達ができるだろうか」と不安になっている。——が、赤ヒロイン＝アーネストが優しく声をかけてくれて(彼女の的には退学させるつもりだったが)、大変、助かったと感謝している。

勇者学校で教えるあらゆることに関して、彼の「常識」は桁が外れている。彼の「普通」は世界の最強者たちのあいだでの「普通」である。あまりにズレすぎているために、生徒たちを驚かせない「普通」がどのくらいなのかさえ見当もつかないほどのレベル。

学校生活とか、街での平民の生活とか、彼にとってはすべて物珍しく映る。そのせいで「田舎出身のおのぼりさん」と誤解されている。

ふかふかのベッドでは安眠できないので剣を抱えて石の床で寝たりする。クー(黄色ヒロイン)の仮親となってからは、彼女を石の床で寝かせるわけにもいかないのに、我慢して布団の中で寝るようになる。

同年代の異性としてアーネスト(赤ヒロイン)を意識している。だがまさか自分が彼女の恋愛対象となっているとは思っていないので、嫌われないために自分の好意は隠し通す。←自己評価が相当低い。

ソフィ(青ヒロイン)に対しては、年下ではあるものの、母親的なものを感じ取っている。母親の愛を知らずに育った反動であるが、自分でも大いに自覚していて、必死にセーブしている。

●赤ヒロイン



「炎の女帝」の異名を持つコワイお姉さん。
勇者学校の筆頭学生。自分に厳しく他人にも厳しい。

名前:

アーネスト・フレイミング。

一人称は「わたし」。

のちに主人公に好意を表すときのみ「あたし」。

年齢:

18歳。主人公より1歳年上。

身長:

165センチ。女性にしてはちょっと高め。

体型:

プロポーションは凄く良い。美巨乳。

だが胸を強調する服装は「はっちゃけた」後でもあまり好まない。肌も隠す傾向にある。

髪型:

髪色は赤。

登場初期は、シニヨンで引っ詰めた髪。

主人公の協力で、それまでの抑圧が解けてからは、ロングヘアに変化。

服装:

魔剣を所持。平服でも剣だけは腰に下げている。
抑制の利いた性格ではあるが、べつに女性であることを否定しているわけでもないので、不謹慎にならない程度にスカートやひらひらの可愛い装飾もたしなむ。

装備:炎の魔剣《ベリアル》

「あなた絶対にズルしたでしょ？ いいこと？ この学校は勇者を目指す実力者だけが通資格のある由緒正しき学校なの。あなたみたいに、いい加減で、適当で、やる気のない人が入れるような場所じゃないの。国王の推薦だからって……、どんな不正が裏にあるのか、絶対、暴いてあげるんだから！」



自他共に認める勇者学校の筆頭。

苛烈な性格で恐れられている。だが他人に厳しい性格が災いして、友人関係はまったくといっていいほど築けていない。

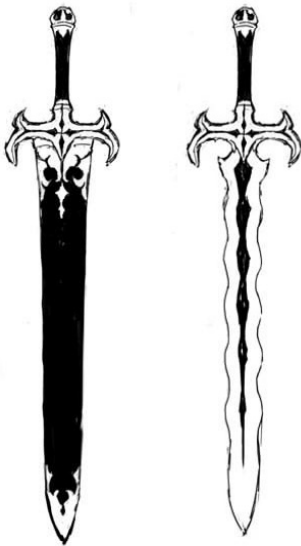
彼女は他人よりも自分自身に最も厳しいのだが、それを知る者は数少ない。(主人公もその一人)

彼女の目から、主人公は、裏口入学でもしてきたように見えてしまった。普通の生徒に対する何倍もの勢いで目をつけられてしまう。

だが生徒たちが恐れおののく「炎帝」の最大出力の眼光を受けても、主人公は気づきもしない。

人を殺せる威力の睨みをきかせても、「おまえ目が悪いのか？」。

彼女がいちいち突っかかってゆくと、「よかった。俺。時期外れの転入だったから友達できないかと思ってたぜ」とか言ってくる始末。同様に友達のいない彼女は、不意を打たれて真っ赤になったりする。



彼女の実力の一端は、その所有する炎の魔剣《ベリアル》の力による。

彼女の家には人格を備えるほどの高位の魔剣が代々伝わっている。その魔剣は彼女の家を「名門貴族」に押しあげた力であり、所有者として認めたときには素晴らしい威力を発揮する。だが不完全に所有すれば、持ち主を戦いと血の渴望へと向かわせて破滅させてしまう。

彼女はいま不完全な所有者状態。

だが持ち前の精神力によって何年間も耐え抜いている。彼女が自分に厳しいのは、それが理由。

彼女と知り合った主人公は、彼女が正しく所有者となるための力添えをすることになる。

真に彼女が恐れているのは、魔剣との対決に負けること。その結果、人斬りの怪物となってしまうこと。勝てる確信がなかったから、魔剣との直接対決を避けて、だましだまし何年も不完全な所有状態を続けてきたのだった。

主人公はそんな彼女に、「もしそうなったときには、俺が斬ってやる」と約束をする。

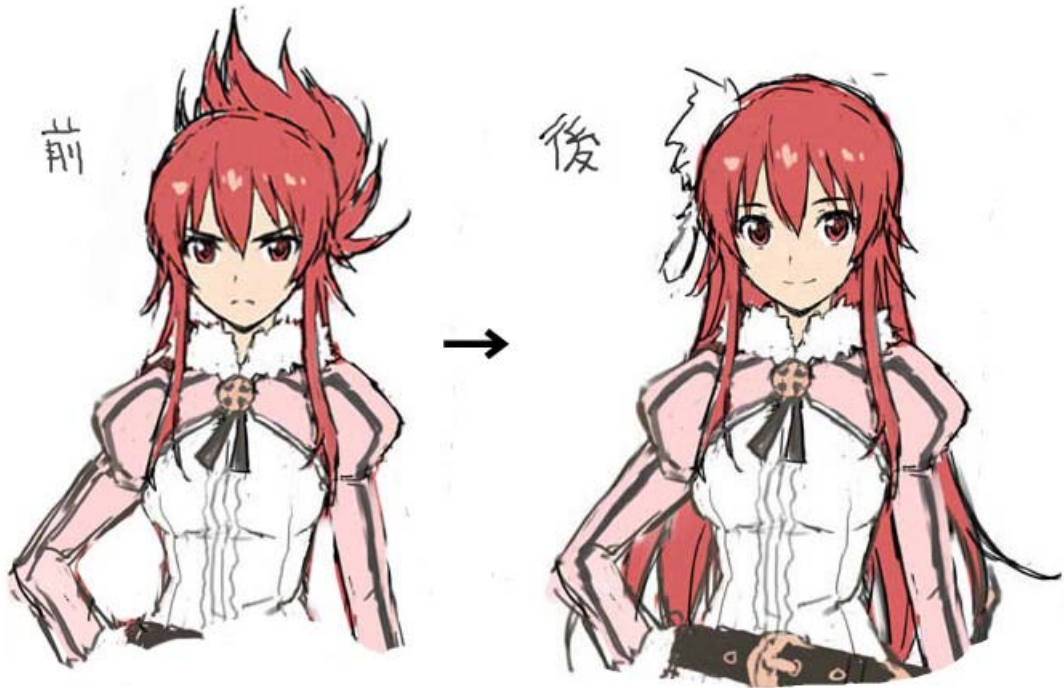
そのおかげで彼女は憂いなく魔剣と立ち向かい、心の強さを示して認められ、完全な所有者となった。

そうってから彼女は、まるで憑きものが落ちたように、人に好かれる人物となった。

気の強いところはそのままだが、自分に厳しく人には優しい。それが呪いの解けた彼女の本当の姿なのだった。

主人公との関係性は、パートナー的なものとなる。(主人公のほうが、やや師匠的ポジション)

主人公による攻略前と後の対比



まるで別人！

●青ヒロイン



「絶対零度の女王」の異名を持つ無表情少女。

じつは、とある機関によって生み出された「人造勇者」。その異常な強さゆえに孤独。

名前:

ソフィティア・フェムト。

(フェムトはこの世界で17月の意味。ソフィティアという人物の17番目のクローンという意味)

愛称は「ソフィ」。一人称は「私」。

年齢:

16歳(ただし肉体年齢)。

加速成長させられているので実年齢はもっと若い。

身長:

153センチ。女子としてもやや低め。

体型:

スレンダーぎみ。でも筋力は凄い。

髪型:

青ベース。

装備:

戦闘スタイルは格闘家タイプ。

圧倒的な身体能力に頼った無造作な戦いかたをする。

「私は作られた勇者……。勇者力を限定的に15秒間だけ発揮可能。私は貴方を超えるために作られた。だけど不完全」

「私は貴方を許す。貴方が勇者であったことで自分を責めたとしても、私は許す」

「貴方は多くの人に勇気を与えた。貴方はそのことを誇るべき」

「貴方のような人物を私は目指したい。貴方が《勇者》であることは、二人だけの秘密」



アヤナミ系。無口少女。

たまに口を開くと事実をずばりと忌憚なく指摘してのけて、かなり辛辣。

感性は常人とだいぶ違っている。羞恥心などもかなりズレている。裸を見られてもまったく気にしないが、食事を見られるとものすごく恥ずかしがる



《人造勇者》として生み出され、育てられた彼女は、大戦が終結してしまったので、仕方なく勇者学校に通っている。命令されることに慣れていて、自分の考えというものをあまり持たない。だが心がないわけではなく、感情をどう扱っていいのか、わからないでいるだけ。

非常にクール(に見える)であり、異常な強さ(赤ヒロインの次で学園ナンバー2)を持っているそんな彼女には、友達がいない。



彼女の異常さに気づきもしない主人公が、せっせと友達になろうと近づいてきたときに、特に拒むこともなく付き合いをはじめる。

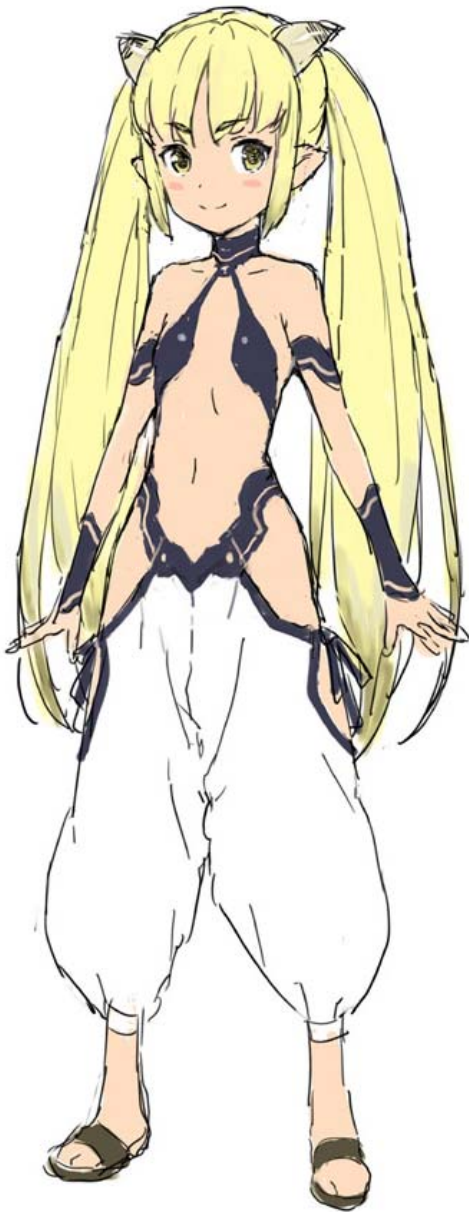
特に主人公が彼女の秘密(人造勇者であること)を知ってしまったからは、「普通の若者の楽しみ」を教えようとあちこち引きずり回されることになるが、「それは任務?」「そうだ! 任務みたいなものだ!」「そう。わかった」と簡単に応諾。



主人公の贖罪代償行為に付き合ううちに、主人公のなかにも、自分と同種の苦悩があることを知る。「自己の否定」からいち早く抜け出して、主人公を許すことで、救いさえする。

主人公との関係性は、母。(主人公を母性的に守ろうとする)

●黄色ヒロイン



ドラゴンベビーの人化したロリっ娘。
超ワガママ。傍若無人。エラそう。きかん坊。
でも張り倒されて「しつけ」をされると、すぐにデレる。

名前:

クーフーリン。(主人公につけてもらった名前)
愛称「クー」。一人称は「我」。

年齢:肉体年齢12～13歳。精神年齢も同様。

身長:138センチ。

体型:ロリ。微乳。(無乳にはあらず。←ここ大事！)

服装:

竜族は強い肉体を誇示する習性があるので布面積は少なめを好む。

黒く見える部分は、服ではなくて、ボディペイント的に体表の色が変わっている部分。

(ドラゴン形態のときの模様のまま)



「おまえは私の親となったのだから、いついかなるときでも我を大事にしなければならないのだ。具体的には起きたときには、おはようと言いつつちゅっとやる必要があるし、ごはんを食べるときには膝のうえにのせてあーんとやらねばならない。だっこされるのは私は嫌だが、もしおまえがどうしてもというのであれば、されてやらないこともない」

「だいたいおまえは成熟したメスの体ばかりみている。我には到底それが我慢ならず、本来であればおまえは私の吐くブレスで焼き焦がされていて叱るべきところなれど、そうすると私も少々困ることになるので大目に見てやっている。感謝しろ。ほどほどにしろ。そしてつまり……、要約するなら——。もっと、かーまーえー」



ドラゴンの孤児。

戦闘訓練用の猛獣として学園に連れてこられたドラゴンベビー。人化が可能という、たいへん珍しい種類。

人間に罾にはめられて捕獲されて連れてこられた。

最強生物であるドラゴンは、生まれてすぐに親に踏みつけられ「上には上がいる」というしつけが行われる。

だが親のいない彼女は、自分より強い相手に一度も出会ったことがなく、一度も負けたことがない。捕獲されたのはあれは「罾」であって「ズル」なのでノーカウント。

ずるい手を使って自分をとらえた人間に怒りを向けて暴れ回って壊すが、主人公にワンパンチで倒されて、「しつけ」を受ける。

その後は主人公を「親」と呼んで懐きまくり。

定位置は主人公の膝の上。アーネスト(赤ヒロイン)とソフィ(青ヒロイン)の嫉妬を買いまくる。

特例で勇者学校の「生徒」となった彼女だが、主人公以外をまったく認めないので、まわりとまったくうまくいかない。

奇しくもドラゴンの「親」になってしまった主人公は、彼女を社会適合させようとがんばる。

彼女もじつは友達が欲しい。

親もなく仲間もなく孤独で生きてきた。だがドラゴンの「本能」がすべてに優先される。自分より強い相手でないと絶対に認められないのだ。

主人公が皆に頭を下げる。「うちの娘の友達になってくれ！」「なにいつてるの水くさいな。わたしたちも友達になりたいし」と、アーネスト(赤ヒロイン)たち。

集団戦で戦って勝つ。主人公が指揮をする百人がかりのチームで「集団で強い」という人間の強さを思い知らせる。負けたことで彼女は人間全体に敬意を持てるようになる。そして友達百人できる。

●ストーリー構成案

○第1話

主人公。勇者学校に転入する。

「普通」がわからなくて苦勞する。アーネスト(赤ヒロイン)に裏口入学を疑われて、因縁をつけられる。

○第2話

アーネスト(赤)の問題解決を手伝う。「おまえが暴走したら、俺が斬ってやる」との言葉でアーネストを支える。

彼女は、見事、魔剣との対決に打ち勝つ。正当な所有者として認められる。

そして主人公は、彼女から物凄く信頼される。

○第3話

主人公。またもや目立ってしまう。すっかり「超生物」扱い。

ソフィ(青ヒロイン)を見かけて、その異様な戦闘力が、妙に気になってしかたがない主人公。

○第4話

ソフィ(青)が「人造勇者」と知ってしまう主人公。「まともな生活」の魅力を教えるべく、あちこちに引き回す。

デートと疑われて、アーネストとソフィの尾行を受ける。

○第5話

校舎を破壊して暴れていたドラゴン・ベビーをワンパンチで叩き伏せる主人公。またもや「超生物」と呼ばれるように……。

ドラゴンの子は主人公を「親」として懐いてくる。寮でワンルーム同居生活が始まる。どこでも引っつくクー(黄色ヒロイン)は、ベッドの中まで一緒。

○第6話

「娘」に友達を作るべく、皆に頼んで回る主人公。

学園の100人に対して訓練をはじめ。主人公抜きで勝たねばならない。

アーネストとソフィを主力にした集団戦が開始される。1匹対100人の集団戦で、本気モードのドラゴン・ベビーに打ち勝つ。

「娘」に友達ができ、めでたしめでたし。